# 松緑白花

Vol ２５

石垣市立石垣中学校
教 頭　市原　教孝

## 10/11(日)　でかした野球部、つかんだ "てっぺん"

# 石垣中 粘って初優

### 軟式野球県予選

中学軟式野球の第7回全日本少年春季大会県予選最終日は11日、浦添球場で行われ、石垣が準決勝で名護を1―0、決勝で伊江を9―6で下し、初優勝した。11月21～23日に宮崎県である九州予選に出場する。

▽準決勝
伊江 2―0 与那原
石垣 1―0 名護

▽決勝
伊江 001202―6
石垣 112104×―9
(伊)根路銘―西江
(石)高那、亀甲、箕輪、下地貴、下地聲―甲本
▽三塁打 根路銘2、玉城(伊)
甲本(石)

伊江―石垣　6回裏石垣2死一、三塁、下地貴太郎の左前適時打で二走の下地駿麻(右)がホームイン＝浦添球場(大門雅子撮影)

沖縄ﾀｲﾑｽ19面
H27/10/12(月)
下：八重山毎日新聞
H27/10/13(火)

### 不連続線

かつて石中野球部が初めて県大会を制覇したとき、市内を大パレードした。新聞はその快挙を書き立て、胸を張って堂々と行進するナインを祝福した▼1965年のことだった。離島の子どもは本島の子どもたちにかなわない。コンプレックスの塊で、勝てる相手でも試合になると萎縮する。そんな時代に石中野球部は全琉を制覇、さらに鹿児島大会まで優勝した▼もう島は大騒ぎで、美崎町の港に1千人が詰めかけ、旗頭や鼓笛隊を先頭に歩くナインを大勢が取り囲み、祝福の声と指笛で街は揺れた▼それが八重山の子どもたちの励ましになった。奮起した児童生徒は陸上をはじめ、あらゆるスポーツで県大会を制するようになり、ついに八重山商工高が甲子園連続出場を果たし、大活躍した▼あの感動と興奮は忘れない。全国の郷友会員が、「うちの子」と胸を張り、大勢が甲子園に駆けつけた。島からも大応援団が球場へ向かい、試合時間には、道行く人が消えた▼11日は、八重高が強豪の興南高校を下して県秋季大会を初制覇した。石中野球部も県大会で優勝した。ダブル優勝だ。これほどうれしいことはない。いまや迫われる立場で、再び甲子園の大舞台が近い。八重高は、九州大会でもきっと期待に応えてくれる。石中も後に続く。郡民・郷友が結束して応援しよう。　(黒島安隆)

―2015年10月13日―

# 粘りの気持ちが勝因に

全日本少年春季軟式野球県大会

## 石垣中、優勝旗手に凱旋

### 11月に宮崎県で開催 九州大会に初出場

第7回全日本少年春季軟式野球大会沖縄予選（県野球連盟主催）は11日、浦添市民球場で決勝まで3試合を行い、八重山代表の石垣中は準決勝で名護中（国頭）に1―0で競り勝ち、決勝では伊江（国頭）を9―6で下して優勝した。ナインは12日夜、優勝旗を手に凱旋（がいせん）、南ぬ島石垣空港で部員や保護者、学校関係者から盛大な祝福を受けた。

石垣は、11月21～23日に宮崎県で開催される九州予選大会に出場する。九州大会出場8チームのうち5チームに来年3月に行われる全国大会への出場権が与えられることになっており、石垣は1勝すれば全国への切符を手にすることになる。

石垣は準決勝で終盤の六回に挙げた1点を翁長、亀田、下地寛の継投で守り切った。

決勝戦では一回に1点先制すると、四回まで毎回得点で5―2と有利に展開。五回に1点差まで詰め寄られたが、六回に一挙4点を奪い、試合を決定づけた。

投げては高那、亀田、翁長、下地貴、下地寛の投手リレーで一度もリードを許さなかった。

ナインは石垣空港では「優勝おめでとう」「感動をありがとう」と書かれた横断幕で出迎えを受けた。

兼松良明監督は「子どもたちは底力を持っている。我慢強く成長してくれた。全4試合で楽な試合はなかったが、粘りの気持ちが勝因になったと思う。大会に新しい風を吹かせることができた」と報告。

南和秀校長は「石中に新たな伝統を築くとともに八重山地区の中学生に夢と希望を与えてくれた。離島のハンディを乗り越え優勝したことは素晴らしい。これからも感謝の心を忘れず、九州、全国でより高みを目指してもらいたい」と激励した。

**田本涼主将の話** 最初の県大会だったので緊張したが、ピッチャーが頑張ってくれた。1番打者なので塁に出てチームに貢献したいと思っていた。九州では、投手陣を援護できる打線をつくって臨みたい。

**翁長佳辰（けいたつ）投手の話** 県大会では2試合を投げ、ボールが高めに行ったり、ボールが多かったりして危ない場面もあったが、気持ちを込めて投げることができた。県大会での反省を生かし、九州大会ではもっといいボールを投げたい。

八重山毎日新聞
H27/10/13(火)

## 「心のスタミナを」 兼松良明監督

大会は２日間で4試合。中学生にはハードな日程だった。「決勝に臨む前の選手たちは満身創痍だった」と兼松監督。５投手の継投で栄冠に導いた。野球部は部員50名の大所帯。８月末まで主役はパワーと技ともに優れた３年生。１・２年生の多くは試合に出られない期間が続いた。その間、部員たちはよく走り込んだ。毎日往復約５kmの坂道。それから先輩たちがひたむきに練習に打ち込む姿を学ぶ。心ひとつに試合に挑む姿をしっかりと刻む。…9月の地区大会、新チームの初陣の時には既に完成の域に近づいていた。

11日準決勝。名護中戦は終盤まで0-0。6回裏二死２塁。仲間歩夢(2-5)のレフト前タイムリーで先制、最終回は下地寛太郎(1-1)がきっちり３人で締めた。よく走り込んでいた２人だ。「あとは心のスタミナ」と、時々、生徒の制服のほころびを縫ってあげたりもする兼松監督は語る。「あいさつ・時間・美化。日常生活、学校生活をきちんと送らせ、ピンチに動じず、チャンスに臆せず、劣勢にも最後まであきらめない心の強いチームにしたい」と。８県の１位が集い、覇を競う九州大会。初戦勝利なら即全国だ。大会まで残り５週間。心のスタミナもつけて大会に臨んでほしい。めざせ九州のてっぺん！、全国のてっぺん！

【沖縄県中体連野球専門部ホームページ】

決勝戦 10/11(日) 浦添市民球場

| | 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 伊江(国頭) | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 0 | 2 | 6 |
| 石垣(八重山) | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 | 4 | X | 9 |

準決勝戦 10/11(日) 浦添市民球場

| 第一試合 | 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 伊 江(国頭) | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 与那原(島尻) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

| 第二試合 | 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 名護(国頭) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 石垣(八重山) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | X | 1 |

二回戦 10/10(土)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 浦添市民 | 伊江(国頭) 5-1 宜野湾(中頭) | 赤間BB | 名護(国頭) 6-5 浦添(那覇) |
| しんきん | あげな(中頭) 1-2 石垣(八重山) | 名護市民 | 東江(国頭) 5-6 与那原(島尻) |

| 一回戦 10/10(土) | 第一試合(左チーム先攻) | 第二試合 |
|---|---|---|
| 浦添市民 | 北(宮古) 5 - 9 宜野湾(中頭) | 久米島西(久米島) 0 - 5 伊江(国頭) |
| しんきん | 佐敷(島尻) 0 - 2 石垣(八重山) | あげな(中頭) 11 - 0 鏡原(那覇) |
| 赤間BB | 浦添(那覇) 11 - 9 美東(中頭) | 名護(国頭) 3 ( 8回 TB ) 2 西原(中頭) |
| 名護市民 | 具志川東(中頭) 15 (8回TB) 16 東江(国頭) | 港川(那覇) 1 - 4 与那原(島尻) |

| | | |
|---|---|---|
| 大会要項 | 参加申込書 | 運営委員会参加公文 |
| 組み合わせ | 監督会参加公文 | 大会役員参加公文 |
| 生徒補助役員委嘱公文 | 役員配置 | 監督会確認事項 |

# 6回打者10人で4点

高校野球の八重山に続けとばかりに、石垣中が初優勝した。離島対決となった決勝で伊江を9－6で振り切り、兼松良明監督は「島の先輩の頑張りに、中学生が続いた。日に2試合で満身創痍（そうい）の中、粘り強かった」とたたえた。

5－4の六回裏、打者10人で4点を追加したのが大きかった。2死二、三塁で2安打の1番田本凌が敬遠されて満塁となり、打席にはここまで無安打の2番下地駿麻が入った。

「カーブに全く合ってなかった。直球しかない」と内角低めの直球を左前にはじき返し、2走者を迎え入れた。二盗の後、適時打でこの回4点目のホームを踏んだ。「取って取られて繰り返しだった。ここで決めたかった」

5投手の継投で6失点、失策3と課題も見えた。九州に向け、田本主将は「失策をなくし、全員野球で優勝を目指す」と気合を入れ直した。

（大門雅子）

沖縄ﾀｲﾑｽ19面
H27/10/12(月)